

桜蔭俳話会 七月句会 (第三六七回)

平成三十年七月二十九日 (日)

〔推薦句〕

星涼し地球に熱の溜まりあり

明美

正確には、地球の北半球であるが、人間が見上げている星の世界と、その人間が踏みしめている大地との対比が面白い。

〔添削句〕

〔原句〕 蔵町の夕べ朱を足す凌霄花

才美

〔理由〕 凌霄花に朱がどうのこうとは言わない。

〔添削案〕 蔵町の夕照の中凌霄花

〔原句〕 点滴の歌ふリズムや夏の雲

かほる

〔理由〕 単に「夏の雲」と置いたのが勿体ない。

〔添削案〕 点滴の歌のリズムや夏の蝶

〔原句〕 蚊遣香だあれも来ない車夫溜まり

才美

〔理由〕 「だあれも」という言い回しと「車夫溜まり」という言い回しの語感の差異に一定の妙味があるが、これに頼るのには限界がある。

〔添削案〕 蚊遣香手持ち無沙汰の車夫溜まり

〔原句〕 点①水ようかん幸せそうに夫の嘘

才美

〔理由〕 夫とか妻と言うのは句を弱くする。

〔添削案〕 水ようかん幸せそうに嘘ひとつ

〔原句〕 蚊を打てり手加減なしに夫の頬

友子

〔理由〕 前句と同じ。

〔添削案〕 蚊を打てり手加減なしに頬打てり

〔原句〕 採血の細き血管汗ばみぬ

かほる

〔理由〕 筆者も血管は細くて深く隠れている。採血は毎回あぶら汗の流れる難行である。「汗ばみぬ」が少し説明的か。

〔添削案〕 採血の細き血管汗の腺

〔原句〕 羅をたためば母の明治かな

幸

〔理由〕 羅ではよく見る句材であるが、作者が感慨

〔添削案〕 羅や母の明治をたたみけり

〔原句〕 衝動買ひ風に揺れをり小判草

ヤエ子

〔理由〕 衝動買ひもどこかに遊びこころがあればいい。

〔添削案〕 衝動買ひ風に遊びし小判草

〔原句〕 緑蔭のうたた寝覚めてつづきの詩

才美

〔理由〕 緑蔭とうたた寝はもつとはつきり遮断する。

〔添削案〕 緑蔭やうたた寝覚めてつづきの詩

〔原句〕 迷ひたる山路は遠しほととぎす

友子

〔理由〕 言葉は整理して。

〔添削案〕 迷ひたる山道遠くに不如帰

〔原句〕 化粧濃き子の目鋭し凌霄花

ヤエ子

〔理由〕 言葉は整理して。子は要らない。

〔添削案〕 化粧して鋭きまなこ凌霄花

〔原句〕 枝豆に一振りモンゴル文字の塩

幸

〔理由〕 枝豆は秋の季語。

〔添削案〕 トマト切る一振りのモンゴルの塩

〔原句〕 イヤリングリンリン鳴らし蚊を払ひ

才美

〔理由〕 折角の「リンリン」が生きていない。

〔添削案〕 イヤリング鳴らして蚊払ひけり

〔原句〕 草笛は男のテネシーワルツかな

幸

〔理由〕 言葉の整理。

〔添削案〕 草笛の男はテネシーワルツかな

〔原句〕 小宇宙をさまよふ夢やハンモック

友子

〔理由〕 着眼点は良い。夢は少し甘いか。

〔添削案〕 ハンモックさまよふ一人小宇宙

〔原句〕 もう駄目だ言いつつ生きる闇螢

眞壽

〔理由〕 言葉の整理。

〔添削案〕 もう駄目と言いつつ生きる螢かな

〔原句〕 絵を描く指の出てをり夏手袋

ヤエ子

〔理由〕 言葉の整理。

〔原句〕水着着る幼大勢遠ざかる ヤエ子

〔理由〕着眼点が良い。言葉の整理。

〔添削案〕着替へしはをさなの水着周りは遠ざかる

〔原句〕かき氷被災者達に届けたし 直子

〔理由〕俳句にはリズム感も必要。可能であれば単
数表現にする。

〔添削案〕被災者の喜ぶ顔やかき氷

〔原句〕めくるめく人の生きる走馬燈 真壽

〔理由〕重厚な内容の秀句である。

〔添削案〕めくるめく人の生きあり走馬燈

〔原句〕大井夫人眠る地深き夏木立 幸

〔理由〕季語の選択は入念に。

〔添削案〕大井夫人眠る一面草いきれ

〔原句〕逝く時はあらかしこ水中花 才美

〔理由〕言葉の意味は正確に。

〔添削案〕逝くときはほんの一瞬水中花

〔原句〕虫干しをする物もなし身の廻り 眞壽

〔理由〕物是要らない。

〔添削案〕虫干しや整理のすすむ身の廻り

〔原句〕工事人滂沱の汗や土の吸ふ ヤエ子

〔理由〕滂沱を使いこなすのは難しい。

〔添削案〕土手工事大地吸ひゆく汗の海

〔原句〕水の星ひと揺れさせて山車起てり 才美

〔理由〕片山ゆう子氏の「水の地球すこしはなれて
春の月」の名句を知っているかどうかによって評価
が分かれる。場所を博多湾に替えてみる。

〔添削案〕一湾の水を揺らせて山車立てり

〔原句〕浜木綿や路地に名残の芝居茶屋 友子

〔理由〕実見の句であるが、句材としては少し古い
か。

〔添削案〕浜木綿や過ぎしかの日の芝居小屋

〔理由〕毎年どう詠もうかと思う句材ではある。

〔添削案〕今年こそ行こうよ行こう饅飯

〔原句〕夏帽子薄毛隠しにチョンと載せ 眞壽

〔理由〕ユーモアの一句。

〔添削案〕夏帽子チョンと隠せし薄毛かな

〔原句〕猛暑日や見舞ひの娘横になる かほる

〔理由〕言葉は整理して。娘は出来るだけ使わない。

〔添削案〕横になる見舞ひの客や炎天下

〔原句〕ペディキュアのブルーブルーに映えるなり ヤエ子

〔理由〕言葉を整理して。ブルーとブルーは離す。

〔添削案〕ペディキュアのブルーゆらめくブルーか
な

〔原句〕海の香に誘われ砂は砂日傘 直子

〔理由〕砂は要らない。

〔添削案〕海の香の誘ふまどろみ浜日傘

〔原句〕ダイエットに食すはつるり心天 友子

〔理由〕言葉は整理して。

〔添削案〕ダイエット目指してつるり心太

〔原句〕陽の光浴びるパソコン日傘さす 眞壽

〔理由〕日傘には陽の光は消す。

〔添削案〕パソコンへさして上げたき日傘かな

〔原句〕髪洗ふココナッツ油のやさしき香 ヤエ子

〔理由〕髪洗ふとココナッツ油の組合せは良い。

〔添削案〕髪洗ふココナッツあぶら香の優し

〔原句〕入院やすべてキャンセルミニトマト かほる

〔理由〕不用意に、「や」で切ると三段切れの句とな
る。

〔添削案〕入院のすべて取消しトマト切る

〔原句〕生誕地に見上げるビルや谷崎忌 友子

〔理由〕生誕地に見上げるビルや谷崎忌

〔添削案〕 生誕地の見上げしビルや谷崎忌

〔原句〕 百日紅豪雨の地にも紅色に 直子

〔理由〕 色の重なりは避ける。

〔添削案〕 百日紅雨の大地の染まりけり

〔原句〕 森の中五右衛門風呂や誘蛾燈 ヤエ子

〔理由〕 着眼点は良い。場所よりも、時間帯を。

〔添削案〕 暮れなづむ五右衛門風呂や誘蛾燈

〔原句〕 親ゆずりの恥ずかしがり屋さくらんぼ

〔理由〕 言葉は整理して。

〔添削案〕 さくらんぼ恥ずかしがりは親ゆずり

〔原句〕 露草や古の青春風にゆれ 直子

〔理由〕 草が風に揺れるだけでは、句が弱い。上くを恋の句にするときには、下句で浮つかないように、締めること。

〔添削案〕 いにしへの胸の高まり芋の露

〔原句〕 宿題や大事な苗に蚊遣焚く 眞壽

〔理由〕 原句中の「に」の使用は、説明的となるので極力避ける。

〔添削案〕 宿題の苗の観察蚊遣香

〔原句〕 真夜中のナースコールや蚊のをりて かほ
る

〔理由〕 蚊の退治は公衆衛生の基本であるから、今時蚊の出て来る病院はないとの意見はあるが、作者は実際に遭遇したのであろう。

〔添削案〕 真夜中の闖入者なり蚊の羽音

（文責 代表 増田守）

（欠席投句 古野明美、恩田才美、稲葉幸、
松浦かほる）